伝書鳩

第22号

井上靖記念文化財団

渦

井上　靖

静かな初冬の日、藍青一色に凪いだ南紀の海はその一角だけが荒れ騒いでいた。波浪は鬼ケ城と呼ばれるその岬の巨大な岩壁を咬み、底根しらぬ岩礁のはざまはざまに、幾つかの大きい渦をつくっていた。むかし鬼が棲んでいたと伝えられる広い岩のうてなの上に立って、私は刻（とき）の過ぎるのも忘れて、ただ刻まれては崩されている渦紋の孤独傲岸なマスクに心うばわれていた。

そこの旅から帰り、都会の喧噪な生活の中に立ち戻ってからも、私はよく、夜更けの冷たいベッドの中で、そこ遠い熊野灘の一隅の黯い潮の流動を思いうかべることがある。そんな時きまって思うのだ、あそこには鬼が棲んでいたのではない、棲んでいた人間が鬼になったのだと。そしていまこの瞬間もまた、あの暗褐色の濡れた肌へに息づき、くろい潮のおもてに隠見しているに違いない名知らぬ藻の、この世ならぬ碧（みど）りの切なさを見つめていると、真実、いつか鬼以外の何ものでもなくなっている己が心に冷たく思い当るのであった。

（『北国』より）

伝書鳩 第22号　目次

渦（詩）　井上靖……2

ご挨拶　井上修一……6

『わが一期一会』再読　井上靖没後三十年に思う　勝呂奏……8

或る日の井上先生　松村伸子……12

鳩のおしらせ①……17

第五回　井上靖記念文化賞　熊川哲也氏・藤原良雄氏に……18

井上靖未発表資料＊6
死脈（監修・解説　高木伸幸）……22

鳩のおしらせ②……33

瓊花と鑑真和上　浦城いくよ……34

祖父と僕とケンタッキーフライドチキン　黒田裕之……40

令和二年度　事業報告　井上修一……44

鳩のおしらせ③……53

鳩のカット　福井欧夏
花のカット　黒田佳子
奥付のカット　岩永　泉

ご挨拶

理事長　井上修一

令和二年一月から始まった新型コロナウイルスの蔓延により、本財団も様々な事業が滞りました。特に令和三年一月二十九日は、平成三年に亡くなった父井上靖の没後三十年の命日でしたので、没後三十年の名を打ったいくつかの催しを令和二年から三年にかけて企画していただいておりましたが、いずれも中止または順延を免れず、誠に残念でした。

第五回井上靖記念文化賞も令和二年度中に選考委員会を開くことができず、コロナが少し収まっていた令和三年七月に選考委員会を開催し、文化賞にバレエダンサーの熊川哲也氏、特別賞に藤原書店の藤原良雄氏を選んでいただきました。賞の贈呈式は令和四年の二月十三日に旭川市で行う予定です。冬の旭川は雪に埋もれているでしょうが、コロナが少し落ち着いてきていますので、再燃せずに無事開催できることを祈っています。

さらにシドニーの「井上靖賞」も中止になりました。ベトナムでは「井上靖賞・日本文学研究論文コンテスト」を実施しましたが、こちらから出かけて、お祝いを申し上げることはできませんでした。

また今年度は理事会も評議員会も三密を避けるために書面で行ないました。直接お目に掛かりお話を伺えない会議がもう二年も続いています。来年度こそは理事会・評議員会の皆様にゆっくりとお目に掛かれることを願っております。

しかし、暗い話ばかりではありません。プリンストン大学の上級研究員の真鍋淑郎氏が地球温暖化の予測法を開発し、今年度のノーベル物理学賞を受賞され、十月九日の朝日新聞夕刊にはご自宅訪問記が写真付きで掲載されました。うれしいことに、そのお部屋の壁には父が熊野灘の友人を訪ねた際に書いた「渦」という詩の墨書が、白鳥省吾氏の詩と並んで飾られていました。

詩「渦」は詩集『北国』に収められていて、私も好きな詩です。本誌の冒頭にも載せてありますので、ぜひご覧ください。

令和三年十一月吉日

『わが一期一会』再読

井上靖没後三十年に思う

勝呂奏（桜美林大学教授）

一九九一年に井上靖が亡くなって、早いもので三十年を数える。節目のその年に、故里の伊豆市では一月恒例の行事〝あすなろ忌〟を長引く新型コロナの流行のために見送ることになった。しかし、他のゆかりの土地では、記念の催しが持たれている。運営が長泉町に移管された井上靖文学館では《井上靖――美をめぐる物語展》、旭川市の井上靖記念館では《井上靖蔵書展Ⅲ――日本及び中国・西域の資料》である。没後の経年と共に忘れられて行く文学者の少なくない中、井上の文学は〝北斗欄干〟の輝きを放っている。

この書き振りから察せられようが、僕はこの間に様々な関わりを持つ幸運に恵まれた。幾つかを挙げるなら、二〇〇五年の沼津文学祭では冊子『井上靖と沼津』を編集し、二〇〇七年の伊豆市での生誕百年祭のシンポジウム「井上靖の愛した舞台――紀州、信州、そして湯ヶ島」にはパネリストとして参加した。二〇一六年の『井上靖「中国行軍日記」』、続く二〇一七年の『教科書で読んだ井上靖』の編集刊行にも関わった。

これらの行事や事業をお手伝いできた幸運に感謝しているが、今新たに湧き出し、溢れようとしている思いがある。それは気付けば僕が六十五歳を超え、いわゆる高齢者に数えられるようになったことを理由にしている。昭和の国民作家であった井上との向き合い方に、これまでと違うものを覚えるようになったのである。犬馬の齢（よわい）を重ねるという言い方があるが、それは僕なりに人間的な成熟をしたからかも知れない。

それを胸に沁みて実感したのは、すでに幾度も読んでいる井上の随筆集『わが一期一会』（一九七五年刊）を開いていた時である。これは井上が六十八歳の時の出版であるが、僕はその年齢に近付いて、これまでの感銘を洗われる思いをしたのだ。よく理解しているつもりでいても、井上の真意に届いていなかったのではと、恥じ入ることがあったのである。そんな経験の一端を書こうと思うが、だからといって年齢のその時々に得る感想を軽んずるつもりはない。

『わが一期一会』の表題に取られた〈一期一会〉の言葉にしても、井上の受け止める意味はよほど深い。井上はそれを「あとがきに代えて」で、『広辞苑』でも引くところの「山上宗二記」を踏まえて記している。

一期一会という言葉は、たいへんきびしくはあるが、いい言葉である。茶道の言葉ではあるが、そこから取り出して、ひろい人生の中に置いても、その四字の持っている輝きはいささかも消えない。確かに人生のあらゆることが一期一会であると言っていい。あらゆることが一生に一度で、再びくり返されることはないのである。

井上が〈一期一会〉という言葉に、いつ眼を留めたかは判らない。若い頃から使いもしたろうが、この言葉の面目を味得するには、人生の経験を条件にしていたに違いない。右の引用に続けて、井上は〈一期一会〉と思い返されることが〈偶然〉に因るものでも、〈そこだけが輝いて見えている〉とする。つまり、運命的な決定性を言うのだが、それを言い得たのは井上の慧眼ばかりに負ってはいまい。晩節に向かう入口に立った眺めが、この洞察を呼び出しているのである。

僕は井上の文章によって、〈一期一会〉という言葉について、改めて胸を打たれる快い思いをしたのだ。同じような思いは、「天上の星の輝き」でも経験させられた。中に中学受験を控えた小学生の井上が、若い先生から〈克己〉という言葉を教えられたとある。代表作『あすなろ物語』（一九五四年刊）にも見えるよく知られ

た挿話だが、〈克己〉の難しさを言い、自身も〈一度も自分に克った経験は持っていないかも知れない〉と振り返る。〝あすなろ〟の精神と同じで、それの達成だけを目標にしてはいけないのだろう。〈克己〉の気構えをもって、日々と向き合うことに意義があるのだ。

ここでもこれを書いた井上の年齢、そしてそれを読む今の僕に自ずと思いは向かい、人生の秘奥に気付かされるようだった。そして、同じ文章の次の言葉に、僕の眼は惹き寄せられた。井上は高校生の時に、〝天上の星の輝きと、わが心の内なる道徳律〟という言葉と出会ったことを書いている。それはカントの哲学に由来すると説明するが、それはどうでもいい。大切なのは、〈人生というものを大きく重々しいものに見せてくれる言葉〉と、初めて出会ったというところにある。

> 夜毎、空には神秘な星が輝き、地上には正しく生きることを考え、悩みながら人間が生きている！　甚だ自分流の文学的な解釈であり、受取り方であったが、私にはこれで充分であったのである。私は若い日自分の感傷を揺すぶったたくさんの言葉の中で、やはりこの言葉が一番大きく、重いものではなかったかと思う。出会わないより出会ってよかったと思う。

井上の出会ったこの言葉は、やがてその文学の根幹に見られるようになる思想を秘めていよう。人間にとっての至高の真善美を明らかにし、やがてそれの実現されることが深く信じられている。井上の描く文学の魅力は、例外なくここに発していると言っても過言でないだろう。井上は滞りの多かった若き日々を振り返り、この言葉を〈青春の護符〉であったとするが、それは〝人生の護符〟であったと言い換えるべきだろう。

井上が『わが一期一会』を書いた年齢に近付いて、これを開いた感想を記してきたが、僕が思いを留めた箇所はまだまだ尽きない。これは言葉との出会いとは異なるが、「ある空間」で得た共感も忘れられない。井上はそこで小泉信三の『海軍主計大尉小泉信吉』の読後感を記して、父の死の時の経験に及んでいる。井上はその時、〈死と私の間に、父親という屏風があって、私に死というものを見させないでいてくれた〉ことに気付かされたという。

この一節から僕が思い出すのは、祖母の葬儀で父がこれを引いて挨拶したことだった。その場では井上ファンの父だから、と聞いていたに過ぎない。しかし、後に僕自身父を失ってみて、父の思いがよく判った。井上が胸の奥に見た〈屏風〉の喩えの視界は、父のものであり、僕のものだったのである。井上の吐露した心象は、恐らく誰もが胸に秘めるものであるだろう。

ところで、『わが一期一会』を書く井上は、『論語』にいう従心、古稀を目前にしている。その井上をして、「老歌人の言葉」に記した感慨は傾聴すべきである。そこに見えるかつて読んだという歌人窪田空穂の随筆は、「九十歳賀すべし」（一九六六年）である。井上は九十歳になる空穂が生涯を振り返って、〈多少の我慢と無理を押さなければ、何事もできなかったという感じを深くする〉とあるのを読んで、この〈老歌人の言葉にして初めて千鈞の重みを持つ〉という。井上は人生の先達である空穂の心境を思い測り、簡単に判ったと済ませていない。長く胸に反芻し、深く判る時を待とうとしている。

同様の井上の待つ姿勢は、「点は墜石の如く」により明らかだろう。タイトルは中国の顔真卿の書を評した言葉〈点は墜石の如く、画は夏雲の如く、鈎は屈金の如く、戈は発弩の如し〉から取られて、〈私の好きな言葉〉であるという。そして、長く向き合っている内に本来の意味を変えて、人生を喩える至言になったとする。その解釈については同随筆に譲るが、井上は〈この言葉ともっと早く出会うべきであったという考え方もできるが、しかし、早く出会わなかったからこそ、いまこの言葉が好きになっているのだと思う〉と書いている。

ここでも井上は、素晴らしい〝一期一会〟を経験していると言えるだろう。その一文も収める一冊を手に取る僕も、改めて井上の文章を読む〝一期一会〟に与っていると、その仕合わせを思っている。

或る日の井上先生

松村伸子（旧制第四高等学校同窓生の娘）

急行の停まる黒磯駅までお迎えに行くと、精悍な顔付きの男の人が一人、腕組みをし、はるか遠くを眺めるような姿勢で駅の前に立っておられました。作家の井上靖氏でした。一九七一年五月のよく晴れた日のことです。

父の旧制四高時代の友人多田新二氏が井上氏を誘って、福島県の郷里の父の家を訪ねてくれたのです。四高祭の応援団長戸松信康氏もご一緒です。

井上靖氏は柔道部、父会田宗太郎は一年上級の陸上部で活躍した選手同士、互いに面識はありましたが近しくお話するのはこれが初めてでした。我が家の書棚には『氷壁』や『敦煌』などの本が並び『あした来る人』のモデルとなった故曾根徹氏は父の親しい友人でもあったので、父は井上氏にお会いできることをこのうえなく悦び、その日を心待ちにしていたのです。母はお茶や軽食の準備や家回りの清掃に朝から余念なく、末娘の私が御一行をお出迎えに行くことになりました。

黒磯駅から郷里の矢吹町まで車で約一時間、窓外の景色などを説明しながら走り出すと「お父様によく似ておられる、若い時のお父様に」と後ろの座席から井上氏の声がしました。やはり父のことを覚えていてくれたと私は思いました。初めて聞く作家の声でした。

家に到着すると、父は中庭の門を開けて旧友たちを緑に面した座敷に招き入れ、休んで頂きました。父は「井上君ね、井上君ね」と嬉しそうに話しかけながら蔵書の初版本をお見せして、署名をお願いしたりしておりました。色紙も用意してありました。氏はこころよくペンを走らせ、それから持参した著書に署名をして父と私に渡してくれました。

謹厳実直、温厚な多田氏を中心に旧友同士の打ち解けた会話が始まりました。話題は自然に井上氏の作品のことになります。私はお茶を運びながら皆の話を聞くともなしに聞いておりました。多田氏が質問をします。年下の井上氏を先生と敬意の念をこめて呼んでいます。私もそれにならい、先生とお呼びすることにしました。

抑制のきいた謙虚な語り口で先生は話し始めました。自作品やその背景、それにつながるエピソード、現在構想している作品について、旅について、史実やその根拠となる資料、言葉の由来等、話は広がります。

印象深いのは、次々と繰り出される先生の言葉が、そのまま紙の上において印刷すればすぐにも一冊の本として成立するほどにすっきりと彫琢されていたことです。端正な、詩的な話し方は耳に心地よく、いきいきとした好奇心と知的探究心も同時にも伝わり来て、その日私たちは井上靖の詩的に雄壮な世界を聞き、引き込まれ、たっぷりと浸ることができたのでした。

その日以来、多田氏を交えた父と先生との交流が始まりました。ゴルフを楽しみ、世田谷の井上家をも訪問するようになりました。母や私が同行する日もありました。

父が伺う約束の時間は大抵午後八時頃、ウイスキーやブランデーと共に始まるのは、同時代を過ごして来た人間同士の気のおけない、しかし熱のこもった会話です。先生は隣室の書斎と応接室を往復しては、出して来た写真や資料を示しつつ話をされました。その頃小説では千利休の話題が多かったと記憶しています。茶会記の日付にある天候をその時代に遡って気象庁に問い合わせるなど、入念な取材の仕方に驚いたものでした。「枯れかじけて寒い」という耳慣れないことばが長いこと記憶に残りました。後に『本覺坊遺文』の重

左より井上靖、多田新二、母・会田宮子、筆者、父・会田宗太郎、戸松信康
（白河高原ゴルフ場にて）

要な主題と知ります。

柔道の話もよくされました。

「練習量が全てを決定する柔道」という上級生の言葉に打たれて高校の三年間を如何に柔道の稽古に明け暮れたかを、熱をこめて語り、「私は強かったんです」と本気で仰言るのです。だれも信じていないのが不服と言わんばかりでした。

後に、エッセイや「無声堂」の詩においてわたしたちは当時の先輩や仲間たちを偲ぶ先生の心情に触れることになりました。

手料理を運んできたふみ夫人には「君もお座りなさい」と椅子を示し、歓談は続きます。おっとりとしたふみさんが加わると座は和やかになり、同行した旅の話など、抜群の記憶力で先生に相槌を打たれるのでした。

夜も更けて父が辞去しようとすると先生は「いいではないですか、まだ宵の口です」とひきとめられるので、また落ち着いてしまい、帰りが夜半をすぎることも度々でした。

ある日、東京にいた私の許にふみさんから電話がかかってきました。

父のために詩の原稿を清書したので取りに来てほしいというのです。

入院患者を抱えてなかなか東京に出る機会のない父に代わり、早速世田谷のお宅に飛んで行くと、二編の原稿が用意されていました。

詩集『運河』に載っている「ホタル」と「雪」でした。「ホタル」は悠久の時の流れに灯ったアイヌ民族の言葉を、「雪」は雪の降る日の鉛筆の文字の濃さを詠った詩です。井上先生が北国に住む父に選んだ詩です。「お父様は北国の方なので」と仰言っていました。

どちらが良いですかと問われ、歴史好きの父のために、私は「ホタル」を選びました。感覚的な「雪」もまた素晴らしいと思いました。特製の大きな原稿用紙を筒型に包装してもらって帰りました。

今も螢の季節がやって来ると「ホタル」の詩を思い、雪の日には「雪」の詩が思い浮かんできます。

それからも、父に託された新刊書を手に時折り世田谷のお宅をお訪ねしました。多忙な身の先生ですが、僅かな時間を割いて応接間に通してくださいました。色々なお話を伺いました。親しい編集者や地方から訪ねて来る関係者、旧友の方などと居合わせる時もありました。先生と来客たちとの対話を身近に聞いて、私は随分、人間観察の勉強をさせて頂いたと思います。まだ世間を知らない私への、まあ、見ておきなさい、このように応対するものですよという暗黙の配慮であったかもしれません。

世田谷のお宅に最初に伺ったとき、私は「先生の詩が好きです」と申し上げました。最初に父の家で頂いた詩集『運河』を読んですっかり心ひかれてしまったからです。硬質な文体に詩の生まれる瞬間を捉え閉じ込めてしまうという発想そのものが詩的でした。今までに読んだどの詩とも違った体験でした。

礼儀正しい先生は、最初に「矢吹のお父様はお元気

ですか」と尋ねられ、私が退出する時は「お父様によろしく」とご挨拶するのを常としました。「いつでもいらっしゃい」と付け加えるのもお忘れにはなりませんでした。

来客の絶えない井上家には、四人の子供たちとその配偶者のどなたかが必ず家にいてふみさんを支えていました。時には姪御さんも加わり、居間兼台所はにぎやかでした。兄弟姉妹はみな飾り気のない人たちで仲が良く、思い思いの意見を言い合っては議論も活発です。人の出入りの多いせいかだれがいてもあまり気にもされないので、私はその和やかな輪の中にいるのが何とも心地よく思えました。そして時々ふみさんのお手伝いをしていました。

先生が旅立たれ、故郷の父も亡くなって数年後、ふみさんを我が家にご招待しました。

贈られた御本や父の蔵書、それに私自身が買い求めた本を集めて、居間の一隅に井上靖の小さなコーナーを作ってありました。ふみさんに、一度それをお見せしたかったのです。ふみさんは、気に入って下さったようでした。会う人ごとにこのことを話されていたと聞きました。

――多少の我慢と無理を押さなければ何事もできません

――武は戈を止めると書きます

――書けば残る、書かなければ消える

――一生勉強です

座談の中で井上先生に教わった言葉の数々に、若く将来の不安の中にいた私はどれだけ勇気づけられたことでしょう。御夫妻に見送られ、暖かいものに包まれてお宅を後にしたのは、つい昨日のことのような気がします。

私もまた、これからやって来る若い人たちに対して、自分の道を怖れずに歩みなさいと、さりげなく背中を押す者でありたいとつくづく思うこの頃です。

⊙井上靖記念館（旭川市）

【企画展】

○「没後30年　井上靖の旅Ⅱ　海外編」

（～二〇二二年一月三十日）

井上靖は、文壇に登場以来、講演や取材を含め毎月のように旅に出ており、日本はもとより、世界各国を訪れています。本展は、「井上靖の旅Ⅰ　日本編」の続編として、一九六〇年七月の欧米訪問（古巣である毎日新聞社の特派員としてのローマオリンピック取材）の記事のほか、旅の写真、旅から生まれた小説、詩、紀行文等の作品を紹介します。

問い合わせ：井上靖記念館

北海道旭川市春光五条七丁目

☎〇一六六―五一―一一八八

【井上靖記念館　青少年エッセーコンクール】

井上靖の没後三十年を記念して、「井上靖記念館　青少年エッセーコンクール」第一回～第九回までの最優秀賞・優秀賞の作品が『井上靖記念館　青少年エッセーコンクール　優秀作品集』としてまとまりました。本コンクールは、二〇一二年に井上邸の書斎・応接間が井上靖記念館に移転されたことを記念してはじまり、二〇二二年度で第十回を数えます。毎回異なったテーマが設定され、全国の中高生からひろくエッセイを募集しています。

A5判並製・116頁
2021年3月15日刊行
編集・発行：井上靖記念館

第五回　井上靖記念文化賞　熊川哲也氏・藤原良雄氏に

井上靖記念文化賞について

一般財団法人井上靖記念文化財団では、平成五年から「井上靖文化賞」を実施し、小澤征爾氏やドナルド・キーン氏など、各分野において顕著な実績を残された著名な文化人に賞を贈ってきましたが、平成十九年の第十五回を最後に中断されていた経緯があります。旭川市と井上靖記念文化財団の連携により、平成二十八年に設立した「井上靖記念事業実行委員会」では、これまでの文化賞の流れを汲みつつ、新たな視点を取り入れて制度を再構築し、優れた作品や活動実績を有し、またその活動を通じて継続的に地域や社会への貢献を行い、これからの更なる飛躍が期待される個人または団体を対象とする「井上靖記念文化賞」を創設しました。

井上靖が数々の名作を生み出し、日本を代表する作家となった足跡や、生涯、各分野の芸術家と交流を持ち、文化芸術への関心と情熱を持ち続けたその業績と遺志を継承する本賞が、各地で活躍されている方々や団体の更なる飛躍のきっかけとなり、更なる文化の発展に寄与することを期待します。

第五回井上靖記念文化賞の選考委員会は、令和三年七月十日に行われました。贈呈式は令和四年二月に旭川市において開催する予定です。

第五回　井上靖記念文化賞

熊川哲也（くまかわ・てつや）

北海道生まれ。十歳より札幌でバレエを始める。一九八七年、英国ロイヤル・バレエ学校に入学。八八年、日本人として初めてマリインスキー劇場（ペテルブルク）にて踊る。八九年、ローザンヌ国際バレエ・コンクールで日本人初のゴールド・メダルを受賞。ヨーロピアン・ヤング・ダンサーズ・オヴ・ザ・イヤー・コンクール（パリ）でも金賞を受賞。同年、東洋人として初めて英国ロイヤル・バレエ団に入団し、同団史上最年少でソリストに昇格。九三年、プリンシパルに任命された。在団中にボリショイ・バレエ団の『ジゼル』をはじめ各国のバレエ団に客演。九六年から九八年にはセルフ・プロデュース公演「Made in LONDON」を開催している。

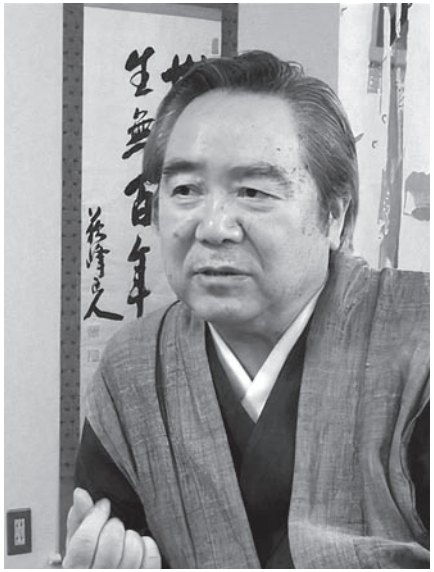
一九九八年に英国ロイヤル・バレエ団を退団し、九九年、自身が芸術監督を務めるKバレエカンパニーを創立。以後、自身のプロダクション含め多くの作品を主演・上演し、年間公演数、観客動員数共に国内外においても有数のカンパニーに成長。

二〇一二年、Bunkamuraオーチャードホール芸術監督に就任する。一七年には完全オリジナル作品『クレオパトラ』、一九年に『カルミナ・ブラーナ』、『マダム・バタフライ』世界初演の成功をおさめる。

また、二〇〇三年にKバレエスクールを開校。次世代のダンサーの育成にも力を注ぐ。

第五回　井上靖記念文化賞　特別賞

藤原良雄（ふじわら・よしお）



一九四九年、愛媛県に生まれ、大阪府で育つ。大阪市立大学卒業。

一九七三年「新評論」に入社し、八〇年、編集部長。八九年に独立して藤原書店を設立。

一九九一～九五年、フランスの歴史家フェルナン・ブローデルの大著『地中海』（全五巻）の日本語訳を出版。同書は九五年に日本翻訳文化賞・日本翻訳出版文化賞を受賞。九二年に第一回青い麦編集者賞、九七年にフランス政府より芸術文化勲章（シュヴァリエ章）を贈られる。

二〇〇〇～一五年、学芸総合誌・季刊『環――歴史・環境・文明』刊行（六十一号で休刊）。〇四～〇七年、鶴見祐輔著・一海知義校訂『〈決定版〉正伝　後藤新平』（全八巻・別巻一）を出版。同書は〇七年に毎日出版文化賞（企画部門）を受賞。〇四～一四年、『石牟礼道子全集・不知火』（全十七巻・別巻一）を出版。

二〇一八年、アカデミー・フランセーズよりフランス語フランス文学顕揚賞を贈られる。

第一回受賞者

菅野昭正（世田谷文学館館長・文芸評論家）
小田　豊（六花亭製菓株式会社前代表取締役社長）

第二回受賞者

芳賀　徹（東京大学名誉教授・国際日本文化研究センター名誉教授）
織田憲嗣（東海大学名誉教授・東川町文化芸術コーディネーター）

第三回受賞者

大城立裕（作家）
伊藤一彦（歌人・若山牧水記念文学館館長）

第四回受賞者

宮本　輝（作家）
岡野弘彦（歌人・國學院大學名誉教授）

井上靖記念文化賞選考委員会委員

川村　湊（文芸評論家・法政大学名誉教授）
栗原小巻（女優・日本中国文化交流協会副会長）
古家昌伸（北海道新聞社編集局文化部長）
酒井忠康（美術評論家・世田谷美術館館長）
辻原　登（作家・県立神奈川近代文学館館長）

（五十音順）

連載 井上靖未発表資料＊6

死脈

本連載は井上靖の妻・ふみの没後、長男・修一がその遺品を整理した際に発見した未発表の日記・書簡・原稿・その他の資料を、別府大学教授・井上靖研究会会長の高木伸幸氏に監修をお願いして、順次紹介していくものです。

今回紹介する「死脈」は未完の草稿で、一九三二年頃の執筆と推定されます。井上靖は当時二十代なかば、京都帝国大学へ入学する前後の時期にあたります。様々なジャンルで懸賞小説に応募するなど、暗中模索の日々を送っていました。未完の草稿ではありますが、その物語設定において、のちの井上作品との関わりが多く見出せる、興味深い資料です。

原文の旧漢字は新漢字に直し、仮名遣いはそのままとしました。明らかな誤字・脱字・衍字・句読点の漏れなどについては、断りなく直しました。振り仮名は原文通りです。

死脈

城島 靖

私立大槻探偵社、菊池宏――女中の差し出した名刺にはそう書かれてあつた。

「すぐこちらへお通ししてくれ。」

静夫はその面長（オモナガ）の美しく整つた貴公子型の、しかし何処かに一脈の憂鬱の影を持つた顔を、遽に、親しい友に逢ふ嬉れしさで輝した。そして扉（ドアー）の所まで行つて菊池宏を迎へ入れた。

「やあ、暫く。」

菊池宏はその広い額と太い眉の健康な容貌に相応しく極く簡単にさう云ひながら、茶卓の前の籐椅子の一つを、青い芝生とその中に円く或は四角にきられた綺麗な花壇の見える窓ぎはまで運び、ゆつたりとそのがつしりした大きな軀を下し、次に足をくみ、そして徐にポケツトから煙草を一本出してくわえ、そして初めて、友情に充ちたやさしい眸を静夫にむけたのであつた。

「丁度よかつた。実は僕の方から今日当りお訪ねしようかと思つてゐたんだ。一寸、相談にのつて頂き度い事もあつてね。」

「ウワハハハ、相談か！　改つて相談なんて云ふと職業柄、相談料をとるぞ。毎日、相談には事務所で

まゐつてゐるんだ。家出人から、迷子から、そしてかけおちの世話まで頼まれるんだからな。」
宏はらいらくにそう云ひながら煙草を旨そうに大きく喫つて吐いた。
「姉の事で、一寸聞ひてもらいたいんだ。」
静夫は額に落ちかゝる長い髪を無雑作にかき上げながら云つた。
「え！　姉さん！　あの秋緒夫人！」
宏は体を籐椅子から起して、静夫の方に向き直した。その顔は一瞬間前のらいらくな宏の顔ではなかつた。眼と耳とをぴーんと緊張させた青年探偵家としての菊池宏の顔であつた。
静夫は、その時女中の運んできた紅茶を、宏にもすゝめながら、自分も一口のんで静かに語りだした。
「菊池君、君は前に、肉親、或は愛人に対する人間の直感の正確と云ふ事に付いて話したことがあつたね。そして君はその時、盛にその直感の正確さに付て力説してゐた。そして僕はその何等科学的の根拠を持たない漠々とした神秘性に反ぱくした事があつた。」
「うむ。」
「僕には君の云ふ事が不思議だつた。卑しくも青年探偵として前途を嘱望されてゐる君の言葉としては確かに僕にとつては不満だつた。僕はその何等、根柢として科学的理論を持たない君の所謂〝肉親或は愛人に対する直感〟と云ふものが君の探偵眼を将来、にぶらせるのではないかと懸念してゐたんだ。そして、その時の君の苦悶にみちた眸を、今でもふしぎに覚えてゐる。勿論とうの昔にその迷を君は卒業して終つたかもしれない。然し、今日の事とそれは別問題だ。何と云ふ皮肉な事だらう。君の所謂直感

と云ふ奴に、僕は近頃悩まされ出したのだ。姉の死に付て、僕は何故か近頃、あのまゝですませない気持ちになつてゐるんだ。姉は心臓麻痺で死んだ。それは三人の医学博士が立派に宣言した。けれど、僕には何故か、そう思えないんだ。きつと誰かに、きつと誰かに……。何の理由もないけれど只そう思へてならないんだ。是が以前君の力説した直感ではなからうか。で……」
こゝこまで語り終つて静夫は冷えた紅茶をぐつと一のみし、寂しそうな笑にまぎらはしながら次の様に付け加へた。
「で、一つ二つ僕には不審に思へる事がないんでもないんだ。然し、もう総てが一月前の事なんだがね。」
静夫の姉、秋緒夫人――こう云つたら読者はまだ胸中に新なる記憶を想起するに困難ではないだらう。故、南条秀夫氏の若き未亡人として、あらゆる富と、あらゆる教養と、それに加ふるに天性の美貌を兼ね具え、大正末期から昭和にかけて、帝都社交界の女王（クイーン）として令名の高かつた南条秋緒夫人その人である。あらゆる社交的な会合には必ずその麗姿を表はし、その近づき難いまでの気品と、又あらゆる男性を魅惑せずにはおかないあの眸と、――二つの相反した美、神と獣の美を併有して、いつもその会合に於ける最も華やかな存在である事を失はなかつた、南条秋緒夫人その人である。
その自由放縦な生活、その奔放な行動は、屢々ジヤーナリズムによりて世人に報導され、或者は秋緒夫人を、新しき現代女性の典型として賛美し、或者は、やがて没落すべき階級の腐つた太陽として誹謗した。
一ケ月前の九月二十六日の夕方、秋緒夫人は、小石川の自宅の茶の間で絶命してゐた。それを発見し

たのは長年、使はれてゐた老婦のさだであつた。さだの騒ぎにより直に近所の医師がかけつけ警官が馳せつけたが、既に冷くなつてゐた。生前、夫人に親しかつたY博士等によつても、明かに心臓麻痺がその死因として公表され、翌々日、盛大な葬儀が行はれ染井の墓地に埋葬された。たつた一人の弟、静夫が何くれとなく万事奔走したのであつた。

そして、表面、華やかだつたが、然し夫君に早く逝かれ、一人の子供もなかつた、家庭的に不幸であつた夫人の一生は終つた。

そして、夫人が死んだ九月二十六日より三日前、即九月二十三日には、新進画家E氏の画の近作〝悪鬼〟の完成祝賀会が行はれ、そのモデルは秋緒夫人であつた。夫人とE氏を中心に白十字でさゝやかな祝賀会の行はれた事は、当日の夕刊諸新聞が悪鬼と夫人の横顔（プロヒール）を写真にして掲載して、特輯となしたのであつた。

それから、三日後、夫人は冷くなつて倒れ、只、E氏のアトリエの中に、生前美しかつた夫人の半裸像のみが寂しく生きてゐた。以上の事は読者の大部分が御承知の事と思ふ。

静夫は低く、力のこもつた調子で話しつゞけ、宏は死の様な緊張で一言一句も逃すまいと云ふ風にぢつと聞き耳を立てゝゐた。

「心臓まひではない。きつと誰かに……只、僕には斯う思えて仕方ないんだ。姉の死を聞いたその瞬間からの僕の気持ちなのだ。

葬儀をすませて、一人きりの姉を亡つた寂しさに取り残されたら、又此の奇妙な気持が執念強く僕の心から離れないんだ。それで姉の身の廻りの世話をしてゐた二人の女中と炊事仕事をしてゐる老婆さだの三人からあの前後の様子を出来るだけ詳しく聞いたのだ。」

静夫は両手で頭をむしやくしやに掴みながら語りつゞけた。それによると秋緒夫人の死ぬ前に、一人の浮浪者（ルンペン）風の風彩の汚い一人の老人が音訪れた事実があつた。そしてその人物の姓名が、佐々木と呼ぶものである事だけは、偶然にも玄関に出迎へた小間使と同姓であつた事によつて、小間使の口から知る事が出来た。そして、も一人の他のこま使が応接間にお茶を運んだ時、夫人がその老人を「博士」と呼んだのを確かに聞いたと云ふのであつた。

そしてその老人が帰つた後、夫人は女中等に「あの方は私と同じ様に不幸な方なのよ、誰にも、どんな事があつても、今日あんな方がゐらつしやつた事を、話してはいけない、わかつて」と笑談の様に、然し真剣な語調で口止をした事実があると云ふのである。

「この老人が、この老浮浪者らしい人物が博士である事が姉の死と何の関係があるかないか、又姉が老人の訪問を口止めした事が姉の死に何の関係があるか否か、勿論判らない。君は僕のこの疑を笑ふだらう。恐らく総ての人が笑ふだらう。だが、僕は愛する肉親の姉に対する直感は、――」

「うん、よくわかつた。君の気持はよくわかつた。兎に角静かに落ちついて何も考へないがいい。君は大分興奮してゐるからね。僕に暫くこの事は任せてくれ給へ。」

菊池宏はそうやさしく云つて、静夫の肩をいたわる様に、やさしくたゝいて元気をつける様に快活そうに、云つた。

それから、半時間程、宏は外国映画の話をしたり、レコードをかけたりして、いろいろと静夫の気持を紛らし、南条静夫の家を、辞した。

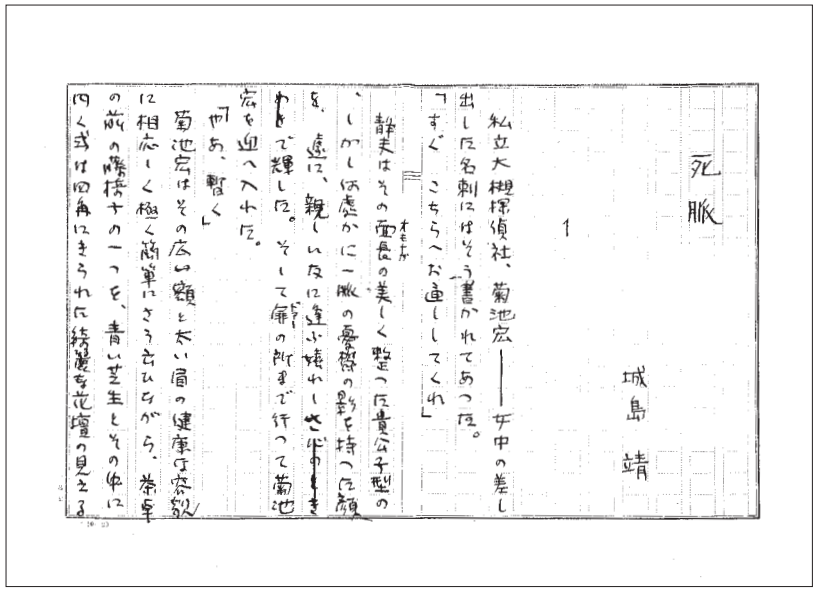
宏は、本郷通りの静かな歩道をゆつくり一歩一歩ふみしめながら歩いていつた。

直感――秋緒夫人――浮浪者――博士――モデル――祝賀会。宏の頭の中で何か整理しようとしたがそこには整理すべき何ものもなかつた。三人の医学博士の公表した心臓まひに何の疑をはさめやう、彼は一寸笑つてみたい様な軽い気持になつた。しかし――だがどうしても僕の直感では――と号んだ友人の苦しそうな表情を次の瞬間思ひ浮べて、いたましいれんびんの情が氷河の流れの様に冷く、彼の胸をはせ流れた。

人間は誰も愛するものの死を信ずる事は出来ないのだ。曾つて自分自身さえ、立山登山中凍死した愛人ゆか子の死を信じられなかつたのだ。誰かが殺さないで、どうして私の愛するものが死なうか――是が打のめされた人間の気持ちなのだ。一人残された人間の気持なのだ。今でさえ、私はゆかの死を信ずる事はできない。友南条静夫の場合もそうなんだ。この場合第三者が何と云つても無駄だ。只、今の場合、自分が友のためなせる事は只一つだ。

疑惑の一番、中枢をなす佐々木と云ふ老浮浪者か、或は老博士を探し出して、夫人の死と何の関係もない事を明かにしてやるだけだ。打のめされた友の持つ疑も苦悩もそれで少しでも減るだらう。――

宏は、歩きながら、そう考へた。そして、さゝやかな晩餐をとるために、肴町の角の小さいレストラントの中に入つていつた。



死脈

1

城島靖

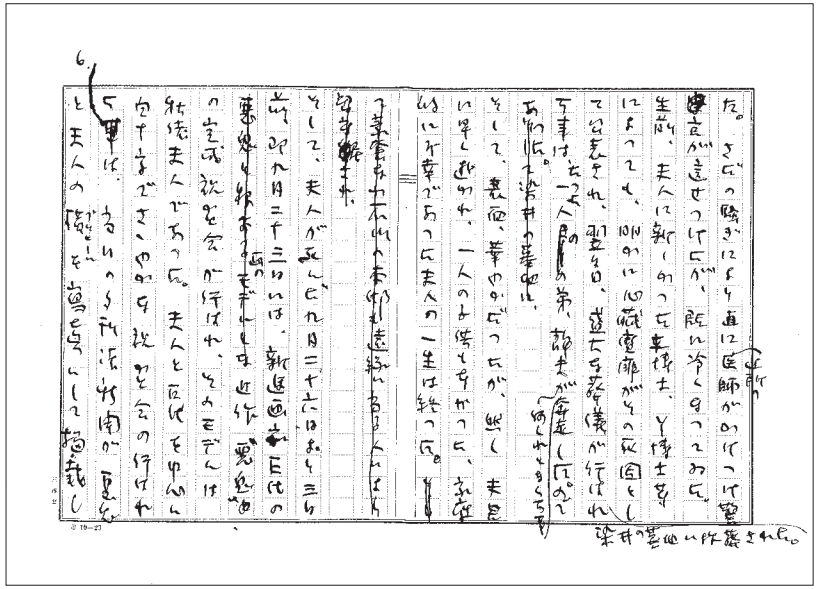
私立大探偵社、菊池宏――女中の差し出した名刺にはそう書かれてあつた。

「すぐこちらへお通ししてくれ」

静夫はその面長の美しく整つた貴公子型の、しかし何處かに一脈の憂鬱の影を持つた顔を、遠に、親しい友に逢ふ嬉しさのときめきで輝した。そして扉の所まで行つて菊池宏を迎へ入れた。

「やあ、暫く」

菊池宏はその広い額と太い眉の健康な容貌に相応しく極く簡単にさうこたへながら、茶卓の前の椅子の一つに、青い芝生とその中に四角式に四角にきられた綺麗な花壇の見える



「死脈」草稿（1・6枚目）

解説

高木伸幸

「死脈」は城島靖の筆名による未完探偵小説である。三越製の四百字詰原稿用紙を使用し、分量は十一枚。一九三二年頃の執筆と推定される。

青年探偵・菊池宏が友人南条静夫の自宅を暫くぶりに訪問する。静夫は一ケ月前、資産家・南条秀夫の未亡人である姉の秋緒を喪っていた。「心臓麻痺」[*1]と診断された秋緒の死因を「直感」で不審に思った静夫は、宏に調べてもらうよう依頼する。静夫の自宅を辞去した宏は、秋緒の死に自分の愛人ゆか子の死を絡めつつ思い巡らす。宏がレストラントに入るところで稿は途絶える。

この草稿において何より注目されるのは、死者である南条秋緒の人物造形であろう。秋緒は資産家の妻であり、夫が早世したこともあって、子供はいない。教養と美貌、気品と妖艶さを併せ持ち、まさに「帝都社交界の女王（クイーン）」であった。その美しくも放縦な女性像は、文壇デビュー作「猟銃」（一九四九年十月『文学界』）の主人公夫人・三杉みどりを想起させよう。秋緒は不審死を迎える前、新進画家E氏の近作においてモデルを務めていた。「猟銃」のみどりが不行跡なマダムを演ずる中、「新生作派」に属する画家・松代のアトリエへ出掛け、「モデル」になっていることと重なるのである。

秋緒は資産家の未亡人という設定において、「あすなろ物語」（一九五三年一月～六月『オール読物』）の佐分利信子にも通じている。子供のいない美貌の妻という側面では、「氷壁」（一九五六年十一月二十四日～一九五七年八月二十二日『朝日新聞』）の八代美那子など、井上靖の現代長篇小説（特に新聞小説）に多く描かれたヒロイン像にも連なっていよう。南条秋緒は井上靖が好んで描いた女性像の一つの原型と言い得るのである。

主人公である青年探偵・菊池宏に目を向けると、愛人ゆか子が立山登山中に凍死した過去を持っている。この設定は、先に『伝書鳩』二十号で紹介した未完小説「溟濛の吹雪に」（一九三一～三三年頃執筆）と似通っている。同作では、ヒロイン薔子が硫黄山で凍死しているのである。後にベストセラー小説「氷壁」を生み出した井上靖が、当時から山登りに興味を持ち、探偵小説にも積極的に登山に関わるエピソードを取り入れていたことが改めて確認できよう。

菊池宏はこの愛人の死に対して、他殺ではないかと疑っている。宏は「肉親或は愛人に対する直感」の正確さを信じており、静夫が姉・秋緒の死に不審を抱いたのも、宏が信ずる「直感」を思い出したからである。

この宏と静夫が信ずる「直感」については、「博士」の登場と併せて解釈する必要があろう。本作には秋緒の死を「心臓麻痺」と診断した「Y博士」や、秋緒が死の直前に応接間で対応した「浮浪者風（ルンペン）」の「博士」、佐々木老人が描かれている。彼らの中でも、特に佐々木は個性的な風采の人物であり、おそらく主要脇役として予定されていたと見られる。

井上靖文学では、「博士」や「大学教授」など、学者がしばしば重要な役柄を受け持っている。「工学博士」である「氷壁」の八代教之助がその代表である。そうした井上靖の学者に対する興味が、早くも顔を覗かせていると言えよう。加えて本作では、宏および静夫の二人と、佐々木老人ら「博士」を共演させることで、あるいは以下のような物語が構想されていたと推察できよう。すなわち「博士」らの「科学的根拠」に対して、宏と静夫の「科学的理論を持たない」「直感」を対置させていく展開である。

後に井上靖は「下山事件」に取材した「黯い潮」（一九五〇年七月～十月『文芸春秋』）で、法医学鑑定に基づく「他殺説」と、記者が信ずる「自殺説」との対立を描いた。「氷壁」では、八代教之介を責任者にしたナイロン・ザイル強度試験を一方に据えながら、岩角でのザイル切断を信ずる人物として主人公魚津恭太を描いた。井上靖は「学者」「学問」の「正確さ」を尊敬する一方、科学を超えた人間の能力をも信じていた。そうした「科学」と「非科学」との対立というモチーフが、ここから窺われると言ったら、深読みが過

ぎるであろうか。

最後に主人公の命名について付け足しておきたい。「菊池宏」というその氏名は、平仮名表記すれば「きくち・ひろし」となる。作家・菊池寛（かん）の本名・菊池寛（ひろし）と一致する。

井上靖は後年、エッセイ「菊池さんのこと」（一九六〇年三月五日『毎日新聞』）で、「氏の代表作といわれている短篇や戯曲はもちろんのこと、新聞小説も大新聞に掲載されたもの」は「一篇残らず読んでいた」、「菊池さんのファンだったわけである」と告白している。愛読する作家への興味、関心がそこには表出されているのである。

菊池寛はただなる作家でなく、文芸春秋社や文芸家協会の創始者として作家の育成にも尽力していた。文壇の大御所と呼ばれたその菊池寛を意識した命名と捉えれば、文筆業を志し、文壇への登場機会を窺う井上靖の野心もそこから垣間見えよう。

以上の通り、未完の探偵小説「死脈」には、南条秋緒の人物造形をはじめとして、後年の井上靖文学を彷彿させる様々な萌芽が現れている。わずか十一枚で中断した草稿であるが、作家・井上靖の誕生過程を窺わせる一資料として参考に供する次第である。

＊1　井上靖は本草稿において、「心臓魔庥」「心臓まひ」と表記している。前者は誤記と判断し、草稿・解説ともに「心臓麻痺」とした。後者のひらがな表記はそのままとした。

⊙長泉町井上靖文学館

スルガ銀行が母体であった一般財団法人の解散に伴って、文学館の事業が長泉町に譲渡され、町営の施設「長泉町井上靖文学館」として二〇二一年七月にリニューアルオープンしました。

【企画展】

○「井上靖　没後30年　美をめぐる物語」展
（～二〇二二年三月八日）

中学時代に色彩学を研究する教師に出会い、大学時代に美学を専攻し、新聞社では美術記者として活躍した井上靖。また、その作品は東山魁夷や平山郁夫らの装画で飾られています。本展では、井上の美の世界を彩る絵画作品を井上靖コレクションを中心に紹介します。

問い合わせ：長泉町井上靖文学館
静岡県駿東郡長泉町東野五一五―一四九
☎〇五五―九八六―一七七一

⊙野本寛一『井上靖の原郷――伏流する民俗世界』

本誌に連載されていた野本寛一氏の「井上靖の原郷」が一冊にまとまり、井上靖没後三十年の二〇二一年一月に刊行されました。本誌での連載を大幅に改稿・加筆したⅠ部と、静岡県出身の民俗学者である著者がどのように井上文学を受容してきたかを書き下ろしたⅡ部よりなります。

長年にわたるフィールドワークの成果と、自伝的作品の精緻な読みから、作家の深奥に伏流する民俗世界を浮かび上がらせる一冊です。

四六判上製・224頁・本体2500円
2021年1月29日刊行
問い合わせ：七月社
☎ 042-455-1385

瓊花と鑑真和上

浦城いくよ（井上靖記念文化財団専務理事）

平成十一年三月「シルクロードの詩」というイベントが佐賀市文化センターで行われた。そのイベントに参加するため佐賀へ出むいた折、県立森林公園を訪れた。公園の中には鑑真和上を讃えて書いた「若葉して」という父の碑文を刻んだ「和上嘉瀬津上陸記念碑」がある。「若葉して」というのは芭蕉が和上のお像を見て詠んだ俳句「若葉して御目の雫ぬぐはばや」からきており、和上のお像のどこか悲しそうなお目の辺りを日本の若葉でぬぐって差し上げたいという句である。

この碑文は父が亡くなる三ヶ月前に書いて渡したもので、平成二年十一月に行われた除幕式には父は病気のため出席することは出来なかった。日中文化交流のシンボルとして碑が建立されて九年の歳月がたっていたが、私は初めてこの碑を見に出掛けた。

その碑は瓊花（けいか）の木で囲まれていた。姉妹都市となった鑑真和上の出身地、中国の揚州市から市花の瓊花が佐賀県に送られてきたのである。

私と瓊花との初めての出会いはこの佐賀へ行ったときである。花は咲いていなかったが、この瓊花を父のお墓にもぜひ植えてあげたいと思い、お願いしてみると「井上先生のお墓にも植えましょう」と翌年、伊豆湯ヶ島の熊野山の墓地に二本の小さい瓊花の木が贈られてきた。あれから二十年余りがたち、木も大きく育ち、四月下旬から五月上旬にかけて花が咲く。この木は高さ三メートルくらいになる。

静岡県長泉町にある県立静岡がんセンターの山口建先生が瓊花の香りを患者さんの癒しに使えないかと思われ、ある香料会社の研究員の人に調べてもらった。

熊野山墓地の瓊花

ジャスミンに似た香りで、白い花によくある香りとのこと。その後、花の写真が採集した香りと共に送られてきた。私は香りの宅配便をいただいたのは生れて初めてのことだった。

額アジサイにも似た五弁の白い花が八つ集まって咲く清楚な花で、満開の時はひっそりと上品な淡い香りをあたりに漂わせている。秋には赤い実が沢山なって、伊豆の山々に囲まれたおだやかな気持ちの良い父の墓地は、一段とのどかな風景をかもしだしている。

湯ヶ島ではこの美しい花の咲く瓊花の木を増やそうと有志の方が挿し木をして、平成二十五年一月の父の命日「あすなろ忌」の催しの一つとして、一メートル程に育った苗木二本を井上家跡地に植樹した。春には私の家にも下さり、庭に植えた。まだ小さい木なのに、もう清楚な白い花がいくつか咲いていた。

瓊花は鑑真和上の千二百年忌を記念して昭和三十八年、中国仏教協会から奈良の唐招提寺に日本で初めて贈られて来た。田中角栄と周恩来による日中国交正常

化がなされる十年も前に日中の架け橋として贈られて来たのである。

「鑑真和上円寂千二百年記念日本文化代表団」の一員として父は五十六歳の時に、安藤更生さんたち六名の方々と訪中している。小説「天平の甍」を書き上げてから六年後のことである。

「天平の甍」は父が昭和三十二年、五十歳の時に「中央公論」に連載し、翌年芸術選奨文部大臣賞を受賞した作品である。その後熊井啓監督によって映画化され、前進座では何度も上演され、中国公演も三度も行なわれた。

奈良時代の聖武天皇は仏教に帰依され、奈良の大仏の建立を命じ、仏教によって世の中を治めようとされた。仏教界の襟をただすために、唐から授戒僧を招こうとされた。当時新しく僧侶になる時に必要な「戒」を授ける儀式を執り行える授戒僧が日本にはおらず、自分で自分に授戒することなどが行われており、世の中が乱れていた。

「天平の甍」では、栄叡（ようえい）、普照（ふしょう）、玄明（げんみょう）、戒融（かいゆう）の四人が「授戒僧を日本に連れて来る」という大変な任務を命ぜられ、天平五（七三三）年に遣唐使船で唐に渡った。授戒僧を探して九年目に揚州の大明寺で鑑真和上に会うことができ、戒律の伝授のために日本に来て下さるようにお願いをした。この強い頼みによって五十五歳の和上は日本へ行く決心をされ、それから小説にも書かれているように大変な苦難の末に、盲目になられ、やっと十年の歳月をかけて日本に渡って来られた。

父が「天平の甍」を書くことになったいきさつを述べてみよう。小説家になる前は大阪の毎日新聞社に勤めていたが、昭和二十三年に東京へ転勤してきて、野村尚吾さんという方に大変お世話になった。歴史小説も書かれ、芥川賞の候補に何度かなられた方である。その野村さんが当時毎日新聞の文壇担当の若い記者だった松本昭さん（後に昭和女子大学副学長）を父に紹介して下さった。父が「古い時代の歴史を書いてみたい」と言うと、松本さんは早稲田大学時代の恩師の安藤更生先生を父に紹介された。

安藤先生は東洋美術史の専門家で、鑑真和上の研究をライフワークにしておられた。戦前は中国で研究され、原稿用紙を積み上げると一メートルもの高さになる論文を書き上げたが、敗戦で帰国する時持って帰れなかったそうだ。戦後早稲田大学教授になられ、昭和二十九年に「鑑真大和上伝之研究」で文学博士号を取得された。安藤先生が「私の資料は何でも提供します」と言って下さり、何回も安藤先生の研究室へ通って「天平の甍」を書いたと父から聞いている。

平成八年五月、唐招提寺で「鑑真大和上伝之研究」を書いた安藤更生と「天平の甍」を書いた井上靖の業績を記念する碑として建てられた「天平の甍碑」の除幕式が行なわれた。二人の戒名を納める法要も、和上のお像が納められている御影堂で行なわれた。広い部屋は東山魁夷の襖絵「波の音　山の雪」に囲まれ、和上のお像の横には栄叡のお像も並んで納められていた。この時はまだ母も安藤更生夫人もお元気で参加され、天気もよい素晴らしい除幕式であった。

戦争が激しくなってきた昭和十九年の秋から、彫刻家の本郷新さんは唐招提寺の依頼を受けて、戦火で和上のお像が焼けてしまっては大変と唐招提寺のお堂に立てこもって寒い中でお像の模刻をされた。やっと出来上がって自宅へ持って帰って置いてあったところ、自宅が空襲に会い、お像も焼けてしまった。父はその頃大阪毎日新聞の美術記者として奈良によく通い、本郷さんが模刻を一生懸命されている姿を見て知っていた。

戦後、幸いにも型が焼けないで残っていたので、本郷さんはそれを元に三体のお像を作られた。一つは和上と関係の深い南京郊外の栖霞（さいか）寺に納められた。文化大革命の時は和上像を守るためにお寺は大変な苦労をし、どこかに隠して守ったそうである。時代も人も変わり長い間行方不明になっていたが、現在は栖霞寺に安置されている。

あとの二体は安藤家と井上家に頂戴した。父は「個人が所有するものではないから」と青春時代を過ごした四高の建物を使用している石川近代文学館へ差し上げ

た。父の誕生日と和上の御命日が同じ五月六日なので、この日を「鑑真まつり」と題して講演や朗読会などが現在も行なわれている。

唐招提寺に贈られた瓊花はその後、よく手入れされ、白い花の満開の時期には見物客を圧倒し、関西方面のいくつかの場所にも移植されている。また、ほのかな香りのする瓊花のお線香も唐招提寺で売られており、父の生誕百年の年には、ファンの方が父のお墓へお供えして下さった。私も「あすなろ忌」の時はこのお香を持参して皆様にお参りをしていただいている。

私は主人と二度、鑑真和上の故郷揚州へ行ったことがある。一度目は平成十四年十月、前進座が「天平の甍」を北京、揚州、上海で上演した時で、私たちは揚州で観劇したかったのだが、都合がつかず上海で見た。三泊四日の短い旅であったが、一日はどうしても揚州の大明寺を見たいと思い、車で四時間半もかけて出掛けた。当日は天気も良く休日でもあったので、大明寺や瘦西湖（そうせいこ）の周りには大勢の人々がくつろいでいた。揚州の市花である瓊花は周囲に沢山植わっていたが、季節柄咲いていなかった。平成二十二年に再訪した時も同じく秋で、花は見られなかった。父は何回も揚州に行っているが、瓊花については何も書き残してはいない。父から一度も瓊花の話を聞いたこともない。きっと知らなかったのだろう。見ていれば必ずこのさわやかな花の詩を書いていたに違いない。

父は「すべてのことは出会いから始まる」とよく言っていた。安藤更生さんに出会わなければ「天平の甍」も書かれていなかったであろう。

とある縁で町田市忠生（ただお）にある東向山築田寺（りょうでんじ）のご住職ご夫妻と知り合いになった。私の著書「父 井上靖と私」のカバーのそでに掲載した写真をご覧になり、瓊花をお寺の庭に望まれた。簡単には手に入らないので、自宅の庭にある瓊花を「井上靖記念文化財団」からとして築田寺へ寄贈した。

町田市の築田寺に植樹された瓊花の苗

去る四月八日、お釈迦さまの生誕を祝う「花まつり」が築田寺で開催された。天上天下を指したお釈迦さまに私も甘茶をかけてコロナの終息を祈った。コロナ禍で延期されていた瓊花の植樹式も行われ、ご住職と一緒に植樹をした。近隣の幼稚園や保育園の園児たちの参加もあり、ご住職は「皆さんの成長とともにこの木の成長も見ていて下さい」と話された。

揚州―佐賀―靖のお墓―浦城家の庭―築田寺と由緒のある樹である。

祖父と僕とケンタッキーフライドチキン

黒田裕之（井上靖孫）

転勤族の父を持ち、引越しで転校の多かった僕と弟には、平日はともかく、休日に遊ぶような親しい友達がなかなかできませんでした。そんな僕たちが休日になると決まって行ったのは、みなが「世田谷の家」と呼んでいた祖父母の家。母に連れられて遊びに行き、年の近いいとこたちの誰かが来れば、待っていましたとばかりに大喜びで一緒に遊びました。

小学校三、四年にもなると、休日は弟と二人きりで世田谷の家へ遊びに行くようになりました。千葉に住んでいる頃は電車を乗り継いで、目黒の公務員宿舎へ越してからは自転車や徒歩で。年子の弟と二人きりで電車に乗るのはちょっとした冒険でしたが、それでも僕は世田谷の家に行きたいと思っていたようです。

世田谷の家に着いたら、まずは祖父の書斎に挨拶に行く、それが決まりになっていました。祖父は「また今週も来たか」、そして決まって「お昼ご飯は君たちの好きなものにしなさい。うなぎか、お寿司か。食べたいものをおばあちゃんに言いなさい」と言いました。うなぎは祖父の好物です。小学生の日常に振る舞うには贅沢すぎると今は思いますが、実際にそのようなものになることもありましたし、祖母が祖父の言うことを聞き流して、出前のラーメンや炒飯ということもありました。同じく遊びに来たいとこたちと騒ぎながら食べるわけで、子供にとっては何を食べるかは二の次でした。

夕方になると、母や伯母なども世田谷の家にやってきて、大人数でわいわいと夕食の卓を囲みました。祖父の好きなすき焼きが出てくることが多かったように記憶しています。

夕食が終わったら子供たちはお風呂。脱衣所のオイルヒーターには、孫たちそれぞれの名前が書かれたタオルが掛けられていました。一日大いに楽しんで、帰りは親の運転する車の中でぐっすりでした。

僕にとっては遊び場であった世田谷の家ですが、いとこが誰も来ない日は、本当に退屈で、静かな場所でした。祖父母は寛容ではありましたが、孫と遊んでくれるわけではなかったし、そもそも忙しい二人にそんな時間はとてもなかったでしょう。

家にあるのは本ばかり、当然ゲームも漫画もありません。それで仕方なくリビングにあるテレビを見るわけですが、それを祖父に見つかると、「子供にテレビばかり見せるんじゃない」と、祖母が怒られてしまいます。僕たちは祖父の気配を感じると急いでテレビを消しました。テレビに限らず、祖父が僕たちに直接注意することはほとんどありませんでした。

祖父は机の傍らに水筒を置き、そこに入れてあるお茶を飲みながら仕事をすることがありました。その水筒を届けるのは、暇な孫たちの仕事です。祖母やフキさん（当時のお手伝いさんで、祖父の遠縁にあたる）から頼まれて書斎に水筒を持っていくと、祖父は小さな仕事を遂行する僕たちに少し気を使ってくれたようで、何かしら言葉をかけてくれました。

けれども、明治生まれの祖父と小学生の僕たちに共通の話題はほとんどなく、そこで祖父は机の周りに置いてある小物をみまわして「欲しいものはないか」と聞いたり、書斎の奥にある書庫を指して「秘密の部屋なんだ。のぞいてみるか」と言ったり。テレビゲームに夢中の小学生には、小物は古色然としすぎていましたし、「秘密の部屋」も黴臭い本の占める空間でしかありませんでした。そんなことを聞いてくる祖父を、僕はぼんやりと「不器用な人だな」と思っていました。けれども、そんな時のやさしい祖父の目は今でも強く

印象に残っています。

世田谷の家の居間は、カウンターで台所とつながっていましたが、そこにはいただきもののお菓子が箱に入ってずらりと並んでいました。それを自由にとって食べることが僕たちには許されていましたが、スナック菓子を食べ慣れた小学生たちに、それらは魅力に乏しいものでした。それを祖父もわかっていたのでしょう。「何か買っておいで。フキさんからお金をもらいなさい」と言ってくれることがありました。

そんな言葉を受けて、僕と弟でケンタッキーフライドチキンを買ってきて食べていたことがあります。すると祖父がやってきて、「どれどれ」と、ひょいとつまんで味見をしました。

次に世田谷の家に行ったとき、僕は祖父から書斎に呼びつけられました。何の用だろうと不思議に思いながら書斎に入った僕に祖父がかけた言葉は「こないだのやつ買っておいで」。

以来、祖父は、僕たちが暇そうにしていると「裕之を呼べ」と誰かに言い、僕を書斎に呼びつけて、「いつものやつを買っておいで」と命じるようになりました。そしてフライドチキンを買ってくると、祖父も居間に出てきて僕たちと一緒につまんだり、書斎に持ち帰ってひとりで食べたり。

年をとってもうなぎやすき焼きが好物の祖父ですから、油っぽいフライドチキンもきっと美味しく食べられたでしょう。それこそが晩年まで精力的に執筆を続けられた体力を養っていたのだと思います。しかしそうはいっても、うなぎやすき焼きとフライドチキンとの違いは、小学生の僕にも十分に理解できていました。ケンタッキーフライドチキンは、話題のない僕と祖父の間での、大事なコミュニケーション・ツールだったわけです。

中学生になって、横浜に引越したころから、世田谷の家に行く頻度が少しずつ減っていきました。しかしその頃には、ケンタッキーがなくとも祖父との会話は自然に成立するようになっていました。祖父はよく「君は今、どんなことに興味があるんだ」と聞いてきました。都度僕はそのときの興味をしゃべったと思いますが、最後には決まって「どんなものでも構わないからとにかく夢中になるといい」、「夢中になれるものに出会えるといい」と返してくれました。祖父は僕の興味対象自体に興味はなかったはずですが、祖父の応答はいつも力強く、その時の僕の背中を押してくれました。そんな言葉に妙に興奮して、眠れない夜もありました。

「世田谷の家」の応接間で祖父と
左が2歳の筆者、右はいとこで同い年の井上恭一
（1976年暮れ頃、撮影者不明）

僕には今、ふたりの小学生の息子がいます。僕と弟がかつてそうであったように、どこにでもいる聞き分けのない小学生の男の子たちです。彼らが、毎週末、二人そろって親も伴わず訪れてくる。なかなか恐ろしい状況です。しかも、祖父には孫が全部で十人もいました。

しかし、世田谷の家はいつでも温かく僕らを迎え入れてくれました。僕たち兄弟が、必ずしもいとこに会えるわけでもないのに、毎週わざわざ電車を乗り継いで出かけていったのは、ゲームも漫画もない退屈な「世田谷の家」が、それでも僕たちにとってかけがえのない場所だったからです。そこは、やさしい目をした不器用な祖父と、温かく寛容な祖母のいる空間でした。

令和二年度

事業報告

理事長　井上修一

本財団と旭川市の間に締結された「井上靖記念事業の実施に関する協定」により、両者は日本文化の振興及び発展に寄与するために協力して井上靖記念事業を実施いたしました。令和二年度も旭川市の「井上靖記念事業実行委員会」の全面的な協力を得て諸々の文化事業を実施・運営する予定でございましたが、令和二年一月から止むことのない新型コロナウイルスの感染拡大により、中止や延期を余儀なくされた事業が多く、誠に残念な一年間でございました。

（一）井上靖を記念する文化賞

第五回井上靖記念文化賞は、令和二年十一月一日から報道機関及び文化芸術団体等を通じて候補者の推薦を募集し、二十件の推薦が集まり、前年度の選考から繰り越しした七件の候補を合わせて二十七件が第五回の候補者となりました。令和三年二月二十日に東京都内にて選考委員会を開催し、受賞者を決定する予定でございましたが、こちらも新型コロナウイルス感染拡大防止のため令和三年七月十日に日程を延期いたしました。従って残念ながら本年度内に第五回文化賞の事業は実施出来ず、令和三年度開催となりました。

なお、令和三年七月十日に行われた選考委員会では、バレエダンサーの熊川哲也氏が第五回井上靖記念文化賞に、藤原書店の藤原良雄氏が特別賞に決定いたしました。選考委員は川村湊、栗原小巻、古家昌伸、酒井忠康、辻原登の諸氏です。贈呈式は令和四年二月に旭川市において開催する予定です。

（二）国内外における日本文化の研究助成

○国内

井上靖文学の研究団体である「井上靖研究会」に研究誌『井上靖研究』の刊行助成を行うとともに、ホームページ管理の助成を行いました。

○オーストラリア・ニュージーランド

平成十八年に、オーストラリア・ニュージーランドにおける日本文学の研究奨励のため、シドニー大学に設立した「井上靖賞」は、第十四回の実施を予定していましたが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止いたしました。

○ベトナム

平成二十七年度に、ベトナムにおける日本文学、文化の研究振興のため、国際交流基金ベトナム日本文化交流と共同で開始した「井上靖賞・日本文学研究論文コンテスト」は、令和二年度に第四回の募集・選考・贈賞を行い、当該事業の実施に係る助成を行いました。

第四回コンテストの審査委員は、Phan Nhut Chieu（文学作家・翻訳者）、Pham Xuan Nguyen（文学研究者・評論家、元ハノイ文学協会会長）、Phan Hai Linh（ハノイ人文社会科学大学日本研究学科准教授・東洋学部科学評議会会長）の諸氏です。令和三年一月十八日、ハノイのメリアホテルで贈賞式を行いました。

研究者部門

第一位　Chau Hong Thao（ホーチミン市師範大学）
“Memory and dream in Haruki Murakami and Kazuo Ishiguro’s novels (A case study of “The Wind-up Bird Chronicle” and “The Buried Giant”)”

第二位　Nguyen Huu Minh（フェ師範大学附属トアン・ホア高校）
“Existential aesthetic sence in the novel of Natsume Soseki”

第三位　Nguyen Tuan Anh（ハノイ人文社会科学大学東洋学部）

「井上靖賞」の受賞者と関係者

“Women’s poetry in Kokinshu（And comparison with women’s poetry in Manyoshu）”

学生部門

第一位　Nguyen Chi Anh（ハノイ人文社会科学大学）

“Discourse on war in relation with the institution of power（Case Study: The novel Eien no Zero by Naoki Hyakuta）”

また、なかなか実施に至らなかったベトナムの翻訳出版助成事業でしたが、令和二年度、ベトナムの出版社ニャ・ナム出版・コミュニケーション株式会社がベトナム語に訳した井上靖『猟銃』の翻訳出版に対して、助成を行いました。

（三）井上靖に関する遺品・愛蔵品の保存・公開

○本財団ホームページ

更新・管理をしました。

○井上靖記念館（旭川市）

令和二年七月一日、『旭川市井上靖記念館報』第二十号の発行に協賛しました。

常設展示の他に、左記のような企画展四回を本財団と共催で開催しました。例年併催している「井上靖講座」は新型コロナウイルス感染症の影響により十月に一回のみ実施しました。

「井上靖　蔵書展Ⅱ――戦国時代の史料」展（令和二年五月二十六日～十月二十五日）

「井上靖　人と文学Ⅹ――『幼き日のこと』を巡って」展（令和二年十月三十一日～令和三年一月三十一日）

「井上靖の旅Ⅰ　日本編」展（令和三年二月六日～五月十六日）

全国文学館協議会共同展示「3・11文学館からのメッセージ――井上靖『幼き日のこと』～あらし～より」（令和三年三月二日～三月三十一日）

○日南町美術館

展示資料寄託契約のもとに常設資料展示に協力しました。

○井上靖文学館（長泉町）

常設展示の他に、以下の企画展を本財団の後援で開催しました。

「井上靖とオリンピック 1960–1964」（令和二年三月十二日～令和三年三月二十三日）

（四）近代文学に関する資料収集・調査研究事業

日本近代文学館との共同事業により、日本近代文学に関する蔵書・資料・アルバム・書簡等の収集整理を行いました。

日本近代文学、殊に井上靖に関する蔵書・資料・アルバム・書簡等の収集整理を行う他、井上靖の資料収集・調査研究を行っている当財団機関誌『伝書鳩』第二十一号を十二月に刊行しました。

（五）講演会開催事業

○文学講演会

令和二年十月に井上靖記念館（旭川市）において、財団理事長井上修一を講師に招き、文学講演会の開催を計画していましたが、新型コロナウイルス感染症の影響により中止となりました。

○青少年エッセーコンクール

旭川市教育委員会・井上靖記念館・北海道新聞社主催、井上靖記念事業実行委員会・本財団共催で第九回

「井上靖記念館　青少年エッセーコンクール」が全国の中・高校生を対象に実施されました。審査員長は吉増剛造氏（詩人）、審査員は平原一良（北海道文学館理事長）、古家昌伸（北海道新聞社文化部長）の両氏です。今年度の募集テーマは「道」で、応募総数二百八十三件の中から中学の部六作品、高校の部五作品を入賞に決定しました。新型コロナウイルス感染症の流行拡大防止のため、吉増剛造審査委員長による講評などを録画収録し、令和三年一月十五日からオンライン表彰式を実施いたしました。

最優秀賞

中学校の部：長尾果乃子「一分の一の道」（旭川市立永山南中学校三年）

高校の部：白井莉奈「最後の道」（白百合学園高等学校二年）

優秀賞

中学校の部：坂田穣「道草」（旭川市立光陽中学校三年）・堀山直浩「ぜいたくな悩み」（札幌市立向陵中学校一年）

高校の部：木村春菜「あれから十年」（北海道寿都高等学校三年）・藤川芽生「『道』に見る日本の文化」（白百合学園高等学校二年）

佳作

中学校の部：菊地馨「龍飛へ」（宮城県仙台二華中学校三年）・西島一樹「軌跡」（利尻富士町立鴛泊中学校一年）

高校の部：石川桜妃「道のありがたみ」（白百合学園高等学校三年）・佐藤萌香「地図にない道」（秋田県立秋田南高等学校二年）

井上靖ナナカマドの会賞

中学校の部：横山和南「祖母の家までの道」（北海道教育大学附属旭川中学校三年）

高校の部：該当者なし

また、井上靖記念館が同コンクールにおける第一回から第九回までの受賞作品を編纂し、令和三年三月に刊行した『没後三〇年　井上靖記念館　青少年エッセーコンクール　優秀作品集』に係る制作助成を行いました。

○あすなろ忌

例年一月二十九日の井上靖の命日に近い日曜日に伊豆市湯ヶ島町の熊野山墓地と天城会館劇場ホールで、伊豆市・伊豆市教育委員会・井上靖ふるさと会主催、井上靖文学館（長泉町）・本財団等の後援で実施しておりました「あすなろ忌」（井上靖追悼事業）の墓参会や「井上靖読書感想文コンクール」などは、新型コロナウイルス感染症の影響により中止となりました。

また、伊豆市の天城湯ヶ島町民劇団「しろばんば」が、開催を予定していた演劇公演も、新型コロナウイルス感染症の影響により中止となり、本年度における助成は実施されませんでした。

○井上靖研究会

研究誌の刊行とホームページ維持・管理に助成を行っている井上靖研究会は、新型コロナウイルス感染防止のため、夏季研究会・冬季研究会を中止しました。なお、令和二年七月に機関誌『井上靖研究』第十九号を刊行しました。

（六）特定寄附事業

令和二年度においては、特定寄附事業はありませんでした。

（七）その他

本財団が直接協力したものではありませんが、井上靖に関係する次のような催しがありました。

○井上靖記念館（旭川市）

令和二年十月二十八日、文学講座「井上作品の中の対話――『花壇』エピソード②」講師・石本裕之氏（旭川工業高等専門学校教授）

令和三年一月三十日、「井上靖没後三十年　ミニコンサート」演奏・池野麻里氏（アイリッシュハープ）、季里氏（オカリナ）

令和三年三月六日、「井上靖　短編小説を読む　①『聖者』」朗読・塩尻曜子氏（井上靖ナナカマドの会会員）、講師・平野武弘氏（当館職員）

井上靖記念館を会場に井上作品を読み続けている市

民サークル「井上靖読書会」主宰の秋岡康晴氏が、令和三年度の旭川市文化功労賞を受賞されました。

○井上靖ナナカマドの会（旭川市立井上靖記念館内）
令和二年八月二十日、『赤い実の洋燈（ランプ）』五十六号発行

○長泉町井上靖文学館
「一般財団法人 井上靖文学館」は作家の存命中の一九七三年に設立され、以来一貫してスルガ銀行の全面的なご支援により運営されてまいりました。この度財団が解散され、令和三年四月からは静岡県長泉町が文学館を引き受けて下さることになりました。「長泉町井上靖文学館」（館長・井出雅人氏）は、改修工事などを終えて、令和三年七月十七日にリニューアルオープンしました。同日からリニューアルオープン企画展「井上靖 没後30年 美をめぐる物語」を開催しています。

○伊豆市観光協会天城支部
同支部は井上靖ふるさと会と協力して井上靖の自伝的小説『しろばんば』に登場する「上の家」を修繕・保存するために、令和二年十一月六日から十二月十八日、必要な費用の一部を集めるクラウドファンディングを行いました。予想以上の支援をいただいたそうです。行政からの助成も受け、改修工事が進み、令和三年十一月にはお披露目会が開かれました。

○石川近代文学館
令和二年五月六日、井上靖顕彰朗読会「敦煌」、朗読・井口時次郎氏

○小坂町立総合博物館郷土館（秋田県鹿角郡）
令和二年九月十五日～十二月十九日、特別展「没後五十年 革新の日本画家 福田豊四郎」、井上靖『あした来る人』（『朝日新聞』連載小説）、『楊貴妃伝』（『婦人公論』連載小説）の挿絵の下絵、井上靖顔写真展示

○筑波大学附属中学校
令和二年九月十一日、講演「むかしの湯ヶ島――父としての井上靖」講師・黒田佳子氏

○海峡の湯（青森県風間浦村）
井上靖が六十年以上前に小説『海峡』を執筆するために滞在した風間村の長谷旅館が平成三十一年一月に取り壊され、その場所に新しい温泉施設・下風呂温泉海峡の湯が建設されて、令和二年十二月一日にオープンしました。その施設の二階に井上靖が宿泊した長谷旅館三号室を移築して再現した「井上靖ゆかりの客室」や、同村と交流のあった同志社創始者・新島襄や小説家水上勉の功績などを紹介する展示コーナーがあります。

（八）役員

令和二年度の本財団の役員（理事・監事）、評議員は次の方々です。

理事長　井上修一
専務理事　浦城幾世
理事　浦城義明　岡崎正隆　狩野伸洋　黒蕨真一　佐藤純子　勝呂 奏　高田敏和
監事　井上敦夫　井上卓也　相賀昌宏　表 憲章
評議員　小西千寿　篠 弘　三木啓史　山口 建
（五十音順）

令和二年度の事業を協力して実施していただいております「井上靖記念事業実行委員会」の委員は次の方々です。

委員長
黒蕨真一（旭川市教育委員会教育長）
副委員長
十河宣洋（NPO法人・旭川文学資料友の会会長）
児玉真史（北海道新聞旭川支社長）
委員
荒川美智（NPO法人・旭川文学資料友の会理事、旭川市井上靖記念館長）

高田敏和（旭川市教育委員会社会教育部長）
監事
東　延江（ＮＰＯ法人・旭川文学資料友の会理事、旭川文学資料館長）
那須かおり（北海道新聞旭川支社事業担当）

（九）住所・連絡先

一般財団法人　井上靖記念文化財団
〒一五六―〇〇五三
東京都世田谷区桜三丁目五番九号
電話・ＦＡＸ：〇三―三四二六―九八三六

井上靖記念事業実行委員会　事務局
〒〇七〇―〇〇三六
旭川市六条通八丁目　セントラル旭川ビル七階
旭川市教育委員会社会教育部文化振興課内
電　話：〇一六六―二五―七五五八
ＦＡＸ：〇一六六―二五―八二一〇

⊙「上の家」改修工事

自伝的長編『しろばんば』などに登場する、井上靖の母の実家「上（かみ）の家」は、明治期の建物（一八七二年頃建築）とされています。伊豆市湯ヶ島にほぼ当時の姿のまま残っておりましたが、建築から百五十年あまりを経、瓦屋根は波打ち、漆喰の外壁も崩れ落ちるなど老朽化が進んでいました。

そこで伊豆市観光協会天城支部と井上靖ふるさと会が、二〇二〇年にクラウドファンディングを行い、資金調達に成功しました。行政からの助成も合わせて、約一四〇〇万円の費用で改修工事が行われ、二〇二一年十一月に完成いたしました。

十二月四日より一般公開が始まり、今後、湯ヶ島の「文学の里づくり」拠点施設としての活用が期待されています。

湯ヶ島散策の折にはぜひお立ち寄りいただき、よみがえった「上の家」をご覧ください。

問い合わせ：伊豆市観光協会天城支部
☎〇五五八―八五―一〇五六

井上靖と「上の家」（写真提供：長泉町井上靖文学館）

改修され、よみがえった「上の家」
（写真提供：伊豆市観光協会天城支部）

編集後記

伝書鳩二十二号をお届けします。

新型ウイルスにより様々な制約がある生活の中で、多くの選択にぶつかり、悩まされます。参加するべきか。断るべきか。受け入れるべきか。反対するべきか。どこまで徹底するべきか。

祖父が生きていたら、どんな選択をするだろう、迷える私たちにどのような指針を与えてくれるだろうか、とすがりたくなることがあります。しかし、台風がくるだけで子供の身を案じて大騒ぎをしたという祖父のことですから、ひたすら引きこもるように指示されたかもしれません。

巨大な渦に決してのみ込まれずに、原稿を完成してくださった執筆者の方々に、心より御礼申し上げます。

西村承子

伝書鳩　第22号

発　行　二〇二一年十二月十日

編集者　西村承子・西村篤
東京都世田谷区桜三―五―九　井上方

印刷所　株式会社　厚徳社

発行所　一般財団法人　井上靖記念文化財団